3017
1/4
302
防
忍

特51
745

紋御召發行御披露

乍憚以口條御披露申上□。先以て四方。御花客樣方彌々御機嫌麗敷。御繁昌の段恐悦至極に奉存□。隨ひまして茲許御覽に入れ□。る雜誌紋御召の儀は。看板に僞の無き新流行紋御召の消息を。一日も早く御目に掛け度いと申す。者婆心よりムり□。抑も此紋御召と申□るは。近年發明の新機にムりまして綾錦の綺羅に過ぎず。銘仙紬に不華に流れず。まつゐ繻珍緞子の支那臭からず。日本生粹の織物にして。其高尙なる。其優美なる。紳士貴婦人は申に及ばず。何方此方より至る迄。着て似合ぬと云ふを無けれど。似合ふて引立たぬ云ふをなし。又御好みに寄りましては。先づ花桐はせつたいより。青は菊菱魚葉牡丹。ちがひ紅葉や立田川。さてはうらすの裏梅や。三蓋松より八重櫻と定紋織り出し自在なれば實に錦上の花を添へ□。されば其評判は。實に流行の王とも云ふべく。旭の昇る勢でムり□。然し此流

行と申す者は。其文字にも現はす通り。流れ行くでムり□故。縱令亀は木の葉の水のまに〳〵。流れ行くに異ならずで。昨日の淵は今日の瀬と。變り易いが浮世れ常。去年の粹は今年の野暮今年の無粹も來年は粹ぢや意氣ぢやと囃されるが。流行物の常でムり□が。うれでは甚だ殘念故。何卒此紋御召斗りは。岸邊に茂る老松れ。常盤の色の爾深く。千代も八千代も枯れず棄たれず。前の河をば流れ行く流行物の淺ましさを。高身で見物出來る樣。致志度いが心願。うれには四方の御花客樣。御引立が第一故。此心根を御賛成あつて相も變ト㐅御贔負に。永當々々御注文の程。隅うら隅さでズラリッと。願い上げ奉り□。其爲め口條左樣。

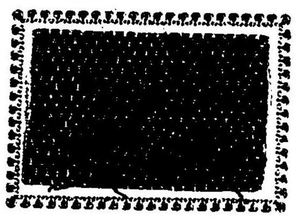
月　日

紋御召に代りて

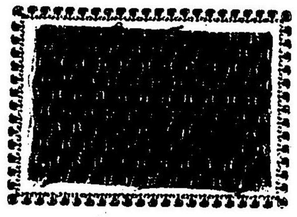
漣　山　人

京都西陣製織　紋織御召標本

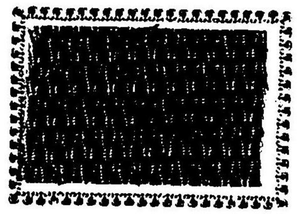
一號



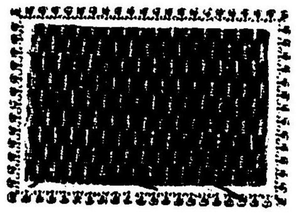
二號



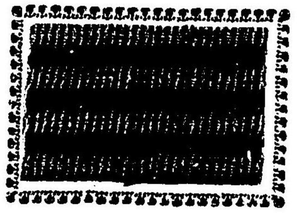
三號



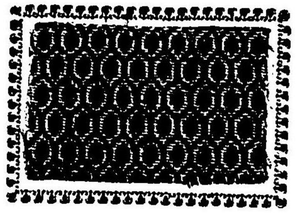
四號



五號

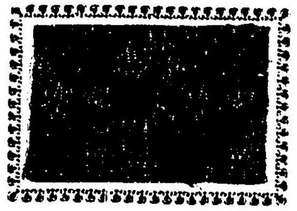


六號



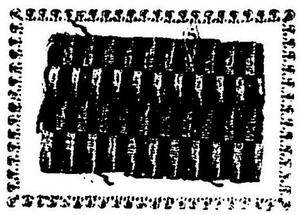
七號

八號



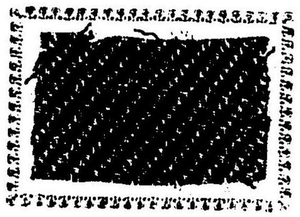
京都西陣製織　紋織御召標本

九號

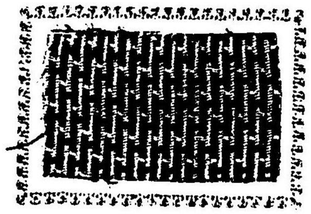


拾參號

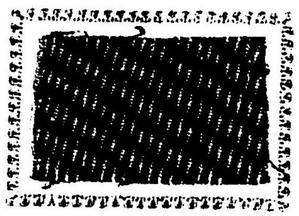
拾號



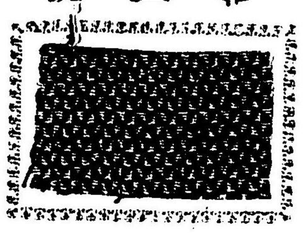
拾四號



拾一號

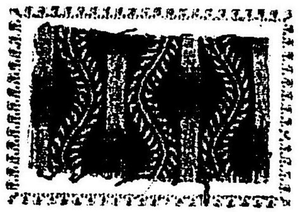


拾五號



拾貳號

拾六號

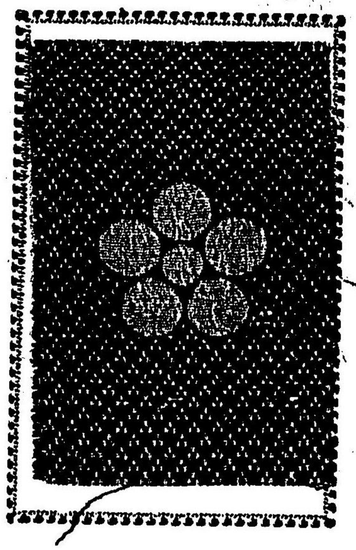


京都西陣製織

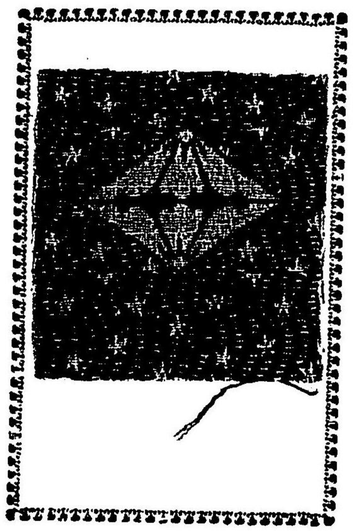
紋織御召定紋織出シ標本

拾七號

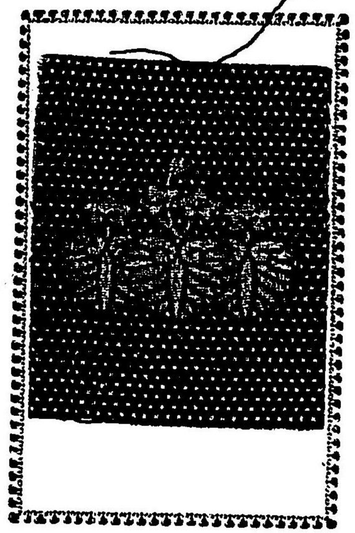
拾九號



拾八號

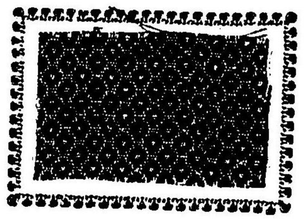


貳拾號

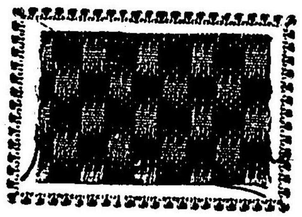


京都西陣製織　華紋織御召標本

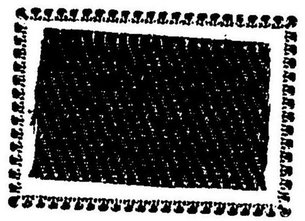
貳拾一號



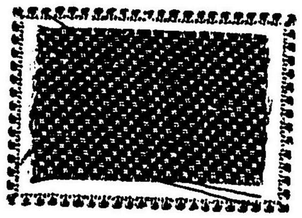
貳拾五號



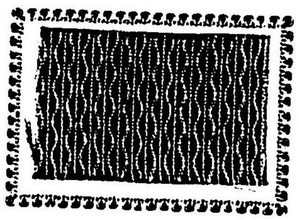
貳拾貳號



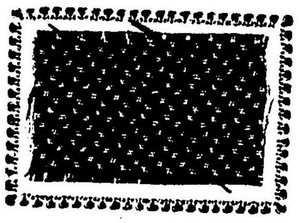
貳拾六號



貳拾參號

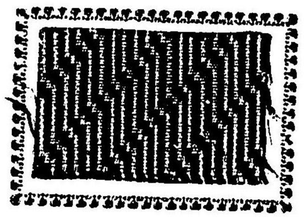


貳拾七號



貳拾四號

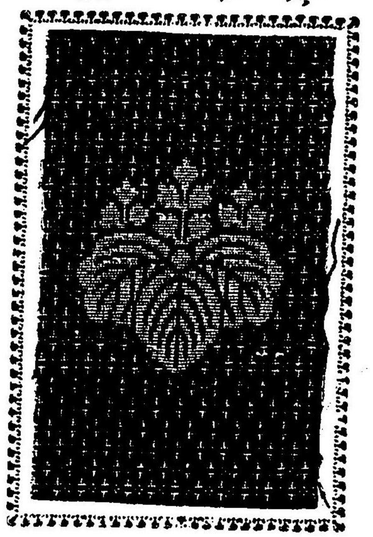
貳拾八號



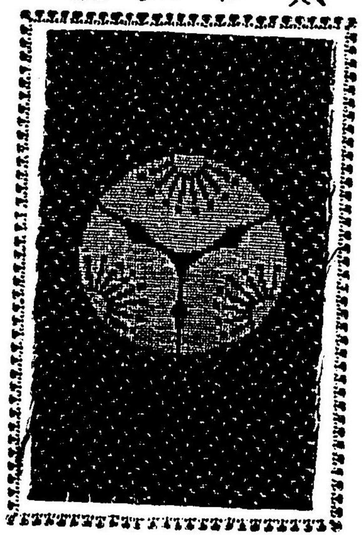
京都西陣製織

華紋織定紋織出シ標本

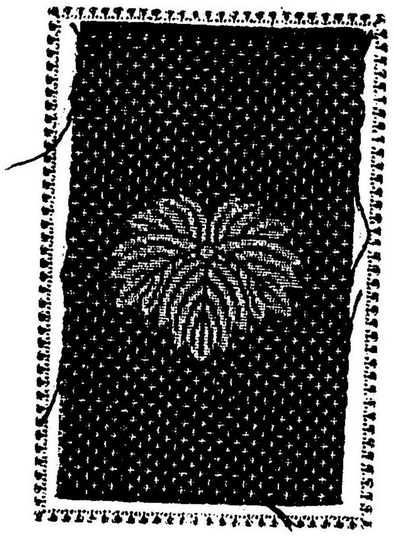
參拾一號



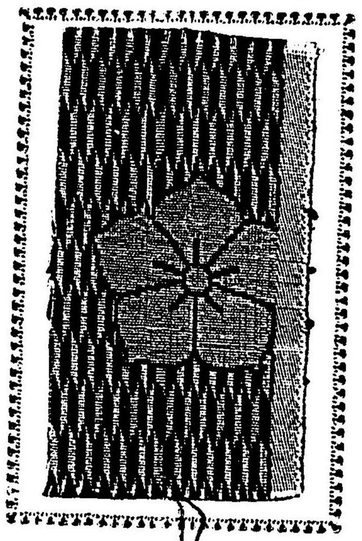
貳拾九號



參拾貳號



參拾號



時花を外さぬ四が勉強

注文は受れと蓮が窮作　**新機紋御召**　大江小波作

（上）品よし原着好町時花屋店前の場

（下）全衣紋坂たんまりの場

一紳士紋野織之助　一書生大鳴紬　一仝結城機雄　一畫工秩父名泉　一幇間絹川一業

一時花屋お職移木

（上）品よし原着好町時花屋店前の場

本舞臺一面お定まりの朱塗格子、少し上手へ寄せて一間の店口、時花屋と染め出したる暖簾、下手好き處に用水桶、日蔽より櫻の釣枝、凡て着好町時花屋店口の体、眼やかなる合方にて幕明く、此處に臺屋の若者と、瘤のある按摩と、紋切形の喧嘩をして居るを、夜鳴温飩の阿爺仲裁し、捨臺詞よろしくあつて、どと下手へ這入る、後しめやかなる合方に成り。揚幕より紋野織之助羽織着流し高帽スチツキ、當世紳士好みの扮装にて出で來り、花道好き處にて向ふを見ながら、

（紋）通ひ廓の大門と、古は、臺辞に云ふ奴だが、　不圖馴れ染めし移木の、　其移香を忘れ兼ね、　互ひに迷ふ戀の闇、辿りつ來れば此處のみぞ、流石不夜城の名に反かず、電氣の光に映る夜櫻、　ハテ美しき眺望ぢやなア。

トよろしく有て本舞臺へゐる、店口より移木の新造おあき出で來りて紋野を見て、

（あき）オヤ紋野樣ようこそ御入來遊ばしました、花魁も先刻からお待ち兼ね早ふ行ておあげ遊ばせ、

（紋）誰だと思つたらおあきさんか、相變らず巧い口だの。

（あき）でも眞實でムいますもの。

（紋）名からして時花屋の移木、浮氣者と名の通つた、あの花魁の事だから、滅多に油斷は成らぬてなア、

（あき）アレさア憎い其口を、早く花魁につねらしてあげたいねエ。

（紋）何はしかれ此處へ來たからには、矢張り逢はぬ譯にもゆくまい。

（あき）ソレ御覽遊ばせな。そんならちやッと御出でなされませ。

ト、無理に手を取て行く

（紋）失張り婦人には敵はぬかのウ。

ト、頭を掻きなから引かれて店口より這入る。入れ違ひて秩父名泉、下手画工の扮裝よろしく、チヨコ〳〵と走り出る、後より若者追ひ出で、

（若）モシ〳〵、さうお腹をお立てなされましては、手前共でも當惑致します、只今花魁に

さう申しますから、何卒少々の間彼方にお居でを。

ト、頻りに袂を引く、其手を振り拂ひ、

（名）イヤ私は歸る、其處放せ。私等が腕では半截五枚ほど書かねば、中々見るとも出來ぬ壹圓札。其の大枚の壹圓を、惜氣もなく酌ぎ込んだも、胡粉の樣なあの腕で、抱かれて寢たいばつかりだ。それに何ぞや此頃は、段々色は薄紅の、文はやれども臙脂はなく。偶々來れば朱の紺のと、事を設けて藍もせず、刷毛で掃き出す仕向方。なんぼ此方が画工でも、筆を喰はへて見てゝ居られぬ。色氣を棄てゝ燒筆の、躍起運動して見せるから、後で後悔すまいぞよ。

ト、駈け出さうとする、引とめる、二人をかしみの立廻りの處へ、又店口より大島紬、結城機雄、兩人共書生風、肩怒らして出で來たり、

（大）結城今のを見たか。

（結）あの生白い紳士めの。

（大）さうよ、あれが噂に聞き及ぶ、移木の間夫の紋野ぢやらう。

（結）さては彼奴が織之助か。ウンあの移木が吾輩を、近頃手嚴しく振り居るも、全く彼奴のある爲めぢやな。

（大）思へば憎くいあの紋野め。

（結）何とか致してやりたいものぢやな。

ト、無念の思ひ入れ。此中以前の若い者兩人を見て、

（若）オヤ貴郎は移木さんの御客様ゝゝオゝ貴郎も。

（秩）それでは貴公達も振られ仲間てムるかな。

（大）残念ながらやられました。して君は如何なされた。

（秩）耻かしながら拙者も同しく。

（結）憚りながら吾輩もポッ〳〵。

（大）揃ひも揃つて大の男を、かう三人まて振り居るとは、失敬極まるあの移木。

（秩）ろれと云ふも頃日は。あの紋野と云ふ虫か付いた故。思へばあの移木より、此紋野こそ恨がムる。

（結）何さま君の云はるゝ通り、吾輩とても其以前は、間夫とか此とか嘗されて、可愛がられた事もあるもの。其情を思ふ時は、今更手は揚げられぬ仕儀。

（大）然らば女は二の次にして、まづ紋野から引捕へ、吾々三人交る〳〵、意趣を晴らしてやると致さう。

（秩）いかにもそれは好くムらう。

（結）そんなら此から踏み込んて。

（大）あの紋野奴を引ずり出し。

（秩）此處で成敗。

（三人）致すと仕やうか。

ト、三人店口へ這入らうとする、中より、幇間一樂。

（一）暫らく〳〵。萬歳樂、大平樂にあらねども此一樂の云ふ事を、一ト通り御聞き下されト、押し戻しに成り、一樂本舞臺へ出る。

（大）オゝ汝は一樂何用あつて。

（結）吾輩達を留めるのだ。

（秩）邪魔立すると汝から。

（大）門出の血祭り擲り飛ばすぞ。

（一）アイヤ揃りたまふな方々。かく云ふ一樂詰りつん出しは、邪魔立致すに非ず。御味方致さん爲めばのり。

（三人）なんと、

（一）されば候聞き候へ、

ト、一樂は捨石に腰を掛け、阿弥陀峯の清正といふ見得で、頻りに國州を氣取ると知るべし。

（一）抑も當時花屋のお職たる、彼の移木と云へる女は、馬琴の所謂る名詮自稱、其氣の多きと緣日の、植木屋如きの及ぶ處に非ず。かるが故に昨日の間夫も、忽ち今日い突き出され、今宵の情人明日の夜は、いけ好かないよと尻を喰てさる。貴殿方の御立腹も畢竟元固は此處なるべし。お葉文字ながらかく云ふ一樂も、一時は太く御最貧受けしが、あの紋野の來たりしより、秋の扇と捨てられて、なんぼ額を叩いても、今ゑ利目もなさけなや、五月蠅ねへとの御託宣、聞いて呆るゝ手りなり。さりながら彼の紋野とて、今ゑそ天下の色男を、一人で脊つた氣で居れど、根が水性のあの移木、

何時まで一ッを守るべき、やがて正体現はして、昨夜枕に貸した手で、肘鉄炮は必常なり、其時あそは又吾々に、番の廻るは玉轉がし、其景物のビードロの、鏡に掛けて見る如し。されば今から荒立てゝ、野暮の誹を受るに及ばず、兎角世間は廻はり持、心靜かに時節をば、待つに越したる分別は、なんと皆さまはムりますめエ、

ト、口巧者に云へど、三人はなか〳〵聞かず。

（大）エイ何をぬかすと思つたら、此一樂奴が小ざかしい、時節の講釋聞く耳持たぬワ。

（結）あれも必常紋野奴に、頼まれて來た間諜者、其手に誰が乘るものかエ。

（秩）彼是云ふ間も時刻がうつる、まづ其奴から打ちのめして、それから奥へ踏み込まう

ト、三人立ちかゝる、一樂捨石から滑り落ち、周章て止めながら、

（一）イヤ待つた、待たんせ、待たしやんせ、時節を待てと云ふたとて、敵方の間諜者とは濕衣にも程がある。滅多な事して後悔なさるな。

（大）ウン、間諜者と云はれるが、左程無念に思ふなら、此から吾々の味方に成て、あの紋野奴を打ちのめすか。

（一）元より私に取りましても、恨の敵あるあの紋野、打つに異存はムりませぬが、それとても今此處で、あの花魁の居間へ踏込み、手荒な事をなさるのは、あんまり野暮でムりましやう。それよりは私に、よい思案がムります。

（大）ナニ思案とは、

（一）サアヽヽヽ一寸お耳をお貸し下さい。

ト、大島に耳語く、大島は又結城に、結城は又秩父に、皆々耳語き合ひて点頭き。

（大）そんなら此から四人連、

（結）云はゞ頼光の四天王、

（秩）畫で見た鬼の退治ならで、

（一）アノ色男の鼻ひしぎ、

（大）大江山にはあらなくに、

（結）丁度處も衣紋坂、

（秩）紋どり打たしてお鉄漿溝へ、

（一）水雜炊の引導を、

（大）ドリャ渡して、

（四人）やらうかい。

ト、四人下手へ這入る、

後若者見送て

（若）南無三あれは大變だ。片時も早〳〵紋野様へオヽさうぢやヽヽヽ

ト、店口へ駈け込む、是にて道具廻る。

（下）衣紋坂たんまりの場

本舞臺、上手へよせてダラ〳〵の坂道、下手柳の立木。向ふ田圃の書割。月の出る仕掛あり凡て衣紋坂夜の体。遠音の騒き唄に、風音を幽めて道具留まると、直ぐバタ〳〵に成り、上手より以前の大鳴、結城、帽子の上より頬冠り、尻端折、ステッキを携へ出る、又下手より名泉、一樂、仝じく忍びの扮装にて駈け出で、本舞臺よろしき處にて出會い、互ひに耳打して左右に忍ぶ。

後本釣鐘を打みこみ、

唄「坂の名も衣紋と聞けばなつかしや、衣紋つきさへ摸様さへ、似合ふ二人の小夜衣、妻重ねじの誓言は、符を合せ氣を合はす、身幅にあらで見返りの、柳の糸の一節の、辿るや戀の暗まぎれ。

ト、下座の歌に成り、楊幕より紋野織之助、後より移木、部屋着のまゝに手拭を冠り、手を引かれて出で、花道よき處にて一寸振あり

（紋）先刻店の若者が、一伍一什の注進に、初めて知った彼奴等の企謀。其計畧の裏をかゝんと、

（移）二人が心を合せ砥や、磨く操を見せてやらうと、此處までやう〳〵來はしたれど、折から月は雲がくれ、

（紋）忍ぶにはよき闇なれど、

（移）こう云ふ時には氣味惡く、

（紋）アレ彼處に何やら、

（移）オヽ恐や、

唄「威すを機會に取りつけば、男はそれを抱きゞめて、

ト、紋野は移木の手を取り、靜かに本舞臺にかゝる。此中以前の四人、左右より忍び出で、大島は紋野を打たうとする、紋野は之を支へる。又結城は移木の手を捕へる、是を初めに六人うらみ合ひの世話暗闘。ドヽ大島、結城は移木を連れて逃げやうとする、一樂、名泉は、紋野を支へる、此見得にて月出る仕掛、

（紋）人の妻をば拐帶す狼藉者暫らく待て。

（大）人の妻とは片腹痛し。夜毎の妻に千人と、枕をかはす遊女をば。

（結）己れ一人に買ひゞめて　而も連れて逃げやうとは、汝　あそ拐帶師。

（紋）とは無禮なり拐帶師とは。吾が妻を吾が連れゆくに、何が拐帶師か其譯聞かう。

（大）又しても妻ぢや女房ぢやと、吾物顔なる其廣言、

（結）それとも移木は汝の妻と、確かな証據があつての事か、

（大）まづ其譯から、

（結）聞かうかイ。

（紋）オヽ証據呼はり面白し、以前は縱令遊女なりとも、身受をなせば吾が女房。

（兩人）エッ、

(紋) 其証據には此一札(ト懐中より証文を出し)なんと肝が潰れたか。

(一) オヽ、其証文は確かに時花屋の。

(秩) 主人が持ちし移木の前借証。

(大) それが其方にあるからは、

(結) あれやちと勝手が違ふたわイ。

ト、四人顔を見合せて手を弛める、其間に紋野は移木を引き寄せ、

(紋) サヽ此の証據があるからは、今日より移木は吾か女房。

(移) 名さへお松と改めて、千代も變らぬ操の色、

(紋) 移木などゝと勤めの身の、

(移) 客をたらかす云はゞ方便。今では紋野の奥様故。

(紋) 指でもさして見やアがれ、

(四人) なんだと、

(紋) 罰が當るぞ。

(四人) 無念のこなし、移木紋野と顔見合せて、

(移) アヽ馬鹿らしい、ホヽ、

(移) 顔はイのう、

(ト云ふを木の頭)

チョン〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵 幕

明治廿七年五月一日印刷
明治廿七年五月廿五日發行

發行兼編輯人 東京市日本橋區久松町壹番地 劒持定兵衛

印刷人 仝市仝區仝町參番地 西喜三郎

印刷所 仝市仝區仝町壹番地 有文舍

特51
745

紋御召

国立国会図書館

072523-000-7

特51-745

紋御召

剣持 定兵衛／刊

M27

CEG-0411